透明な宇宙空間は、紙の上で進化し続ける。

UEKIDO MITSUAKI
ILLUSTRATOR

澄み切った夜空をふと見上げる時、人は何を想うのだろうか。何億光年もの彼方から届く星々の輝きを見るにつけ、この地上でのこまごまとした営為が、ひどくはかなくもいとおしいものに感じるのは、何も筆者だけではない。今回紹介するイラストレーターの上木戸光秋さんも、そう思っているに違いない。

彼の描く世界は巨視的だ。青い地球の上を赤いクジラたちが悠々と泳ぎ、中空には異次元への扉のような三角形の空間が開き、その彼方には透明な惑星（?）が漂っている。あるいは、エメラルドグリーンの空の下、未来的建築の建ち並ぶビーチに、原色の道化師たちが戯れ、その様子を青く澄んだ月が下界を眺めるように浮かんでいる。その眼差しは、「神の視点」といっても過言でない。

「宇宙についての本を読むことも勿論好きですが、僕のイメージの源泉はいつ頃だったか忘れましたが、ある夢を見たんです。澄み切ったグリーンの海の上を、それと同じ色のドームがどこからともなく現われる、といったもので、まるでかつて自分が見たことある風景みたいに、そのイメージを見るにつけ、僕は郷愁を感じるんです」と、上木戸さん。う〜ん、何やら神秘的な話である。彼の宇宙的ヴィジョンの源泉は、この不思議な夢にあるようだ。

もうひとつ、彼のイラストの特長は、深い奥行きを感じさせる構図にある。現在、建築、内装パースの作成や、建築、店舗、インテリアデザインなどの仕事をも手懸けている関係上、その技術がイラストレーションにも生かされているのである。

「大学ではグラフィックデザインを専攻していましたが、卒業後はイラストレーターとしてデザイン事務所に就職したんです。ところが入社した事務所が後につぶれてしまい、以降転々とあちこちの事務所を渡り歩いたんです。その間、パースの描き方も習得して、インテリアや建築関係の仕事をするようになったんです」。

最初、パースを描くのに大変苦労したという上木戸さん。「早さ、的確さ」が何よりも要求され、彼は仕事をこなしながら、一点透視図、二点透視図、俯瞰図といったパースを描くのに欠かせない技術を独学で習得していったという。そのために「自分の作品を描く大切な時間を、パースの勉強のために犠牲にした」と述懐する。だが、この時の努力が実を結び、今日のようなイラストを描く時、特に構図を考えるのに役立っているそうだ。人間、寄り道をしてもどこかでそれが上手く肥やしとなって現われるものなのだ。

やがて建築、インテリアデザイナーとして独立。建築、店舗デザインの仕事をこなす一方、上木戸さんの内でイラストレーションへの情熱が再燃し始めた。

「二年前から、空き時間を見つけては少しづつ自分の作品を描き始めたんです。最初、三角形を描き、その中にグリーンのドームを描き…そうこうしている内に周囲に海を描いたり、赤いクジラや道化師たち、宙にはためくリボンを描いたりして、だんだん絵の世界が拡がっていくんです。ですから、今僕の手元にある作品は、ほとんど一〜二年かけて描いていったものばかりで、まだまだ描き足りないと思っているものもあるんですよ」と、上木戸さん。その創作過程は、あたかも宇宙誕生のプロセスを見るかのように雄大だ。画面に次々と展開される上木戸さんのイラスト世界が、紙の上の小宇宙といった観があるのも、そんな長い年月を経て作られていったところに理由がありそうだ。

将来はイラストの仕事をメインに展開したいと、上木戸さんはいう。

「まだやっと始めたばかりですからねえ。今の段階は、僕にとってはほんのプレリュード。作品数自体も少ないので、今、100号ぐらいの大作の構想を練っている最中なんですよ。今まで描いてきたスペーシー部分に日本的な要素をミックスしたようなもので、京都で永年仕事をしているからには、京都的なものを自分のイラストでも表現できたら幸いだと思っています」。

来年は公募展への出品や、作品を描き貯めて個展も開催したいと、上木戸さんは語った。彼の描く小宇宙が、これからいかなる進化をとげていくのか、われわれも見守っていきたいところだ。

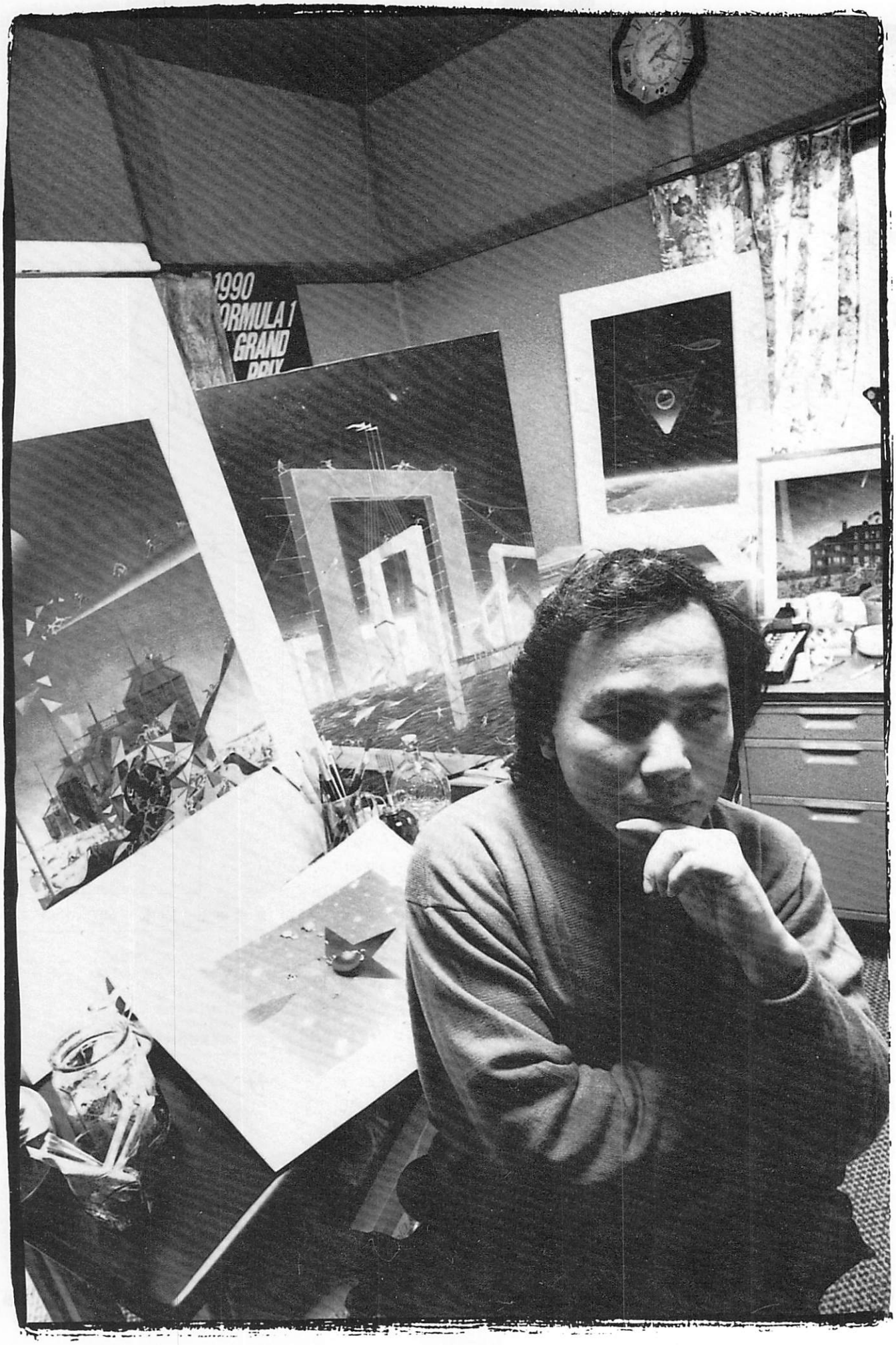
ライター／今江ユリ

photo by M.OHTA

ファンタジックな異空間を描く、ニューエイジ・イラストレーター。上木戸光秋

BORN TO 1952

1952年生まれ。藤川デザイン学院（現・京都芸術短期大学）グラフィック科卒。デザイン事務所、建築事務所勤務を経た後、独立。フリーの建築、インテリアデザイナーの仕事の傍ら、イラストレーターとしても活躍。'91年京都府京都市主催「京都ルネッサンスシンポ'91」のポスターに、イラストが起用される。長岡京市在住。


1990
ORMULA 1
GRAND